

## サードプレイス志向と地域自己効力感が地域コミットメントに与える影響：離職期間有無の差異を含めた検討

著者	片岡 亜紀子, 石山 恒貴
出版者	地域活性学会
雑誌名	地域活性研究
巻	9
ページ	15-24
発行年	2018-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00023382">http://hdl.handle.net/10114/00023382</a>

# サードプレイス志向と地域自己効力感が地域コミットメントに与える影響

## －離職期間有無の差異を含めた検討－

The Impact of Third-Place Orientation and Sense of Community Self-Efficacy on Local Commitment  
: Examining the Differences between the Existence and Lack of a Period between Jobs

片岡 亜紀子・石山 恒貴(法政大学大学院政策創造研究科)

Akiko Kataoka, Nobutaka Ishiyama (Hosei Graduate School of Regional Policy Design)

### 要旨

本稿では、サードプレイス志向や地域活動に関する自信(地域自己効力感)が地域コミットメントに影響を及ぼすのか、昨今の生き方や働き方の変化を鑑み、離職期間有無の違いを考慮し説明することを目的とした。

回答者 1035 名(離職期間有り 515 名、無し 520 名)のアンケート調査を分析した結果、離職期間の有無にかかわらずサードプレイス志向が地域自己効力感を介し地域コミットメントに正の影響を及ぼすこと、交流型サードプレイス志向から地域コミットメントへの影響には地域交流自己効力感と地域学習自己効力感を媒介とする 2 つの経路があること、地域の担い手を増やす方策として、離職期間を経験した者は交流型の利用が、離職期間を経験していない者は交流型とマイブレイス型のバランスの良い利用が有益であることが明らかになった。

**キーワード：サードプレイス、地域自己効力感、地域コミットメント、離職期間**

## 1. 課題

### 1-1. 研究の背景と目的

人口減少や少子高齢化において生き方や働き方が変化中、継続就業を是とする時代から離職期間の有効性に着目する柔軟な視点が求められている。しかしこれまでの先行研究では、離職期間を経験している失業者は労働者に比べ自信を低下させており(Eden & Aviram, 1993)、アイデンティティの喪失にもつながる状況を経験している(廣川, 2006)。また再就業を目指す女性が就業時の生活とのギャップから自己評価を極端に低下させていることが明らかになっている(羽田野, 2007)。そんな中、地域のサードプレイスが地域活性化の核として期待され(小林・山田, 2014)、離職者の地域活動の場として有用性が認められている(片岡・石山, 2017a)。サードプレイスとは、Oldenburg(1989)が提唱した概念であり、家庭(第1の場)でも職場(第2の場)でもない第3のインフォーマルな公共生活の場、とびきり居心地よい場所を意味する。

なお、本稿ではNPOや自治会、カフェや居酒屋など地域に存在し活動する場を総称し地域のサードプレイスとした。

地域活動においては、地域での交流や学習が個人の自信を高めており(羽田野, 2007; 矢口, 2004)、加えて地域での交流は地域への愛着形成に影響を及ぼしていた(引地・青木・大淵, 2009)。しかし、地域のサードプレイスでの交流や学習から生じる個人の自信とその自信の高まりによる地域への愛着形成に着目した研究は管見の限り見られない。そこで本稿は、サードプレイス志向と地域での自信の高まりが地域の愛着形成にどのような影響を

及ぼすのか、昨今の生き方や働き方の変化を鑑み離職期間を経験したものとそうでないものの視点を考慮しながら説明することを目的とする。これにより多様な生き方、働き方に变化する時代における地域の担い手増加の方策を提供できるであろう。

なお、本稿における地域とは日常の生活行動圏と定義する。これは、引地・青木(2005)の定義に準拠したものであるが、本稿の先行研究での交流や学習経験が居住地近辺の活動であることから本稿の目的に合致しており、以降この定義を使用することとした。

### 1-2. 先行研究レビュー

#### (1) サードプレイス志向

サードプレイスの代表例はイギリスのパブやフランスのカフェであるが、Oldenburg(1989)によればその重要な特徴は、中立性、社会的平等性の担保、会話が中心に存在すること、利便性があること、常連の存在、目立たないこと、遊び心があること、で示される。他方、日本ではOldenburg(1989)の示した特徴とは必ずしも一致しない形式で展開されてきた。交流を主な目的とする交流型と、人を気にせず個人で居心地よく過ごすマイブレイス型に区別できるとされる(小林・山田, 2013, 2014)。

マイブレイス型には、自分のためにゆっくりと静かな時間を過ごすというニーズがあり(江藤 鈴木 松原・奥, 2011)、一般的なファストフード店や(本柳, 2015)カフェでも、マイブレイス型の利用が存在する(畠山・丹羽・佐野・菊池・佐藤, 2015; 丹羽・佐野, 2011)。

他方、カフェの店主と利用者が交流し、「なじみ」が形成されるカフェもある(井川・高田・三浦, 2005)。「なじみ」

が発生するカフェとは、社会的な交流が実現しており Oldenburg(1989)の定義するサードプレイスの特徴と一致するであろう。

また、地域活性など具体的な目的を意図した交流型のサードプレイスも存在する。片岡・石山(2017b)の調査によれば、神奈川県横浜市の港南台タウンカフェは行政、商店主などと連携しイベントを開催することで地域への興味を喚起しており、住民はカフェの提供するイベントに参加することで地域に関心をもったり地域活動にかかわるようになっていた。また、東京都調布市の非営利株式会社ポラリスは設立者の子育て時の問題意識を発端に活動を始め、母親のニーズに応じ働く場を地域の中で掘り起こすことで地域の活性化に寄与していた。

他にも高齢者の居場所づくりを目的としてNPOと大学生が協働するサードプレイス(大橋・加藤, 2015)や企業が新規事業や社会課題解決のためのアイデアを創出するためのサードプレイス(石山, 2015)などがある。

以上をまとめると、サードプレイスはマイプレイス型と交流型に区分される。さらに交流型を Oldenburg(1989)の定義するサードプレイスの特徴と一致する社会的な交流(以降、社会的交流型と呼ぶ)と社交以外の具体的な目的を意図した交流(以降、目的交流型と呼ぶ)に区分することができよう。

## (2) 地域自己効力感

本稿では、地域での活動から生じる個人の自信を「地域自己効力感」とした。自己効力感とは Bandura(1977)が提唱した概念であり、必要な行動がうまくできるかどうかという効力予期を意味している。自己効力感には2つの水準があることが知られており(Bandura, 1977; 坂野, 1986)、1つは課題や場面に特異的に影響を及ぼす課題特異的な自己効力感であり、もう1つはより長期的に一般化した日常場面の行動に影響する一般性の自己効力感である。

まず、課題特異的な地域自己効力感について示す。これまででも地域行動において人のつながりを意味する社会的環境、地域の集団との関わり、祭りやイベントへの参加の重要性が指摘されていた(引地・青木・大淵, 2009)。また地域での交流や学習が住民のキャリア形成に寄与し(羽田野, 2007; 矢口, 2004)、離職者の学習活動が個人の自信の高まりと地域の愛着形成に影響していたことが明らかになっている(片岡・石山, 2017a)。

Kataoka(2017)の調査によれば、千葉県市川市の女性起業支援では、起業を目指す女性が市主催の起業塾やビジネスプランコンテストに参加することで自身の起業プ

ランを具体化させたり、志を同じくする仲間の活動に刺激を受け励ましあうことで自信を高めていた。この活動は起業を目指す女性と行政関係者や地元商店主とのマッチング機能を果たしており、起業を目指す女性が地域活動に参加する機会を増やしていた。また、千葉県鎌ヶ谷市で情報教育の支援を行っているITサポートありのみは、高いITスキルをもつ母親を中心としたメンバーが子供たちのITスキル向上のために尽力していたが、メンバーはその経験により自信を高めるだけでなく、活動を通じ教師や保護者と関係を深め、地域に根付いた活動を長年続けていた。

そこで本稿では、このような地域活動という特定の場面に影響を及ぼす自信の高まりを、羽田野(2007)、矢口(2004)、引地・青木・大淵(2009)、片岡・石山(2017a)に基づき「地域自己効力感(課題特異的)」とした。

次に一般性の地域自己効力感について示す。より長期的に一般化した地域における日常場面に影響を及ぼす自己効力感とは、坂野(1986)の一般性セルフ・エフィカシー尺度<sup>1)</sup>を参考に「地域自己効力感(一般性)」とした。一般性自己効力感とは、個人差があり自分が未経験の状況を適切に処理できるとする期待に影響を与えている(Sherer et al., 1982)。

## (3) 地域コミットメント

地域コミットメントとは、研究蓄積のある組織コミットメントの知見や分析手法を、地域におきかえ援用している概念であり地域活性化に寄与することが確認されている(柴田・板倉・関・真鍋, 2005; 中塚, 2008)。組織コミットメントの中でも3次元モデルに着目した Allen & Meyer(1990)の有効性に関する検証は数多く(高橋, 1997)、組織への情緒的な愛着を意味する情動的コミットメント、経済的理由や勤続年数の長さ由来する継続的コミットメント、規範意識や義務感を意味する規範的コミットメントを要し組織に対する愛着形成を多角的に分析している(高橋・渡辺・野口・Meyer, 1998)。柴田・板倉・関・真鍋(2005)が、組織コミットメントの3次元モデルを地域に援用し作成した質問項目に因子分析を行った結果、地域への愛着を示す情緒的な尺度、地域に対し冷静な判断を示す理性的な尺度、地域に対し恩義や義理を示す道徳的な尺度から構成される3次元の地域コミットメントを確認した。この3次元は組織コミットメントの3次元モデルの知見を、地域への愛着形成という観点において十分に応用できる概念であると考えられる。したがって本稿では、地域の愛着形成の結果変数として、3次元の地域コミットメントを使用することとした。

## 1-3. 分析モデルと仮説

本稿では、先行研究に基づき図1の分析モデルを構成し

仮説を検証する。サードプレイス志向の要因として先行研究から明確な目的をもち交流する「目的交流型サードプレイス志向」、社交を主な目的とする「社交的交流型サードプレイス志向」、個人が居心地よく過ごす「マイプレイス型サードプレイス志向」に分けることとした。

次に、地域での活動から生じる個人の自信を意味する地域自己効力感「地域自己効力感(課題特異的)」と「地域自己効力感(一般性)」に分けて設定することとした。上述のとおり自己効力感には課題や場面に特異的に影響を及ぼすものと一般化した日常場面に影響を及ぼすものと2つの水準があるためである(Bandura, 1977; 坂野, 1986)。

最後に結果変数として地域コミットメント(柴田・板倉・関・真鍋, 2005)を設定した。上述のとおり、地域コミットメントは研究蓄積がある組織コミットメントの知見や分析手法を地域に援用している概念であり(柴田・板倉・関・真鍋, 2005)地域活性化に寄与していることから結果変数として妥当であると考えた。操作的に定義したこれらの概念を前提に、以下のとおり仮説を設定する。

仮説 1: サードプレイス志向は目的交流型、社交的交流型、マイプレイス型に分かれる

上述のとおり、日本におけるサードプレイスには、地域活性やキャリア形成など明確な目的をもち人々が交流する目的交流型サードプレイス、Oldenburg(1989)が定義するパブやカフェなどでの社交を目的とし交流する社交的交流型サードプレイス、個人が居心地良く過ごすマイプレイス型サードプレイスに分かれると考えられる。したがって仮説1が導かれる。

仮説 2: 地域自己効力感(課題特異的)は地域学習と地域交流に分かれる

上述のとおり、これまでの先行研究では地域のサードプレイスでの学習や交流により個人が自信を高めていたことが明らかになっていることから、自信の高まりには地域での学習や人々との交流が関係していると考えられる。したがって仮説2が導かれる。

仮説 3: サードプレイス志向は地域自己効力感を介し地域コミットメントに正の影響を及ぼす

上述のとおり、地域のサードプレイスでの学習や交流が個人の自信を高めていたことから、サードプレイス志向の者はその期間の地域での経験を肯定的に捉え地域への愛着をもつと予想され、地域での自己効力感の高まり

が地域コミットメントに影響を及ぼすと考えられる。したがって仮説3が導かれる。

仮説 4: 離職期間有無の違いによって、地域コミットメントへの影響の過程に差がある

上述のとおり、離職期間を経験している者は自信の低下が見られていたことから、離職期間の有無によって地域自己効力感に違いがあることが予想され、地域コミットメントに及ぼす影響に差があると考えられる。したがって仮説4が導かれる。

以上の仮説をもとに本稿の分析モデルを図1に示す。



図 1. 本稿の分析モデル

## 2. 方法

### 2-1. 調査方法

2017年4月13日から4月14日にかけて、全国の男女の被雇用者に対し、インターネット調査会社を通じてWebによる質問紙調査を実施した。

回答者は1035名、回答は無記名で行われた。

### 2-2. 調査対象者の属性

調査対象者の属性は、表1、表2のとおりである。

表 1. 調査対象者の人数、平均年齢

		全体		
		人数	男性	女性
全体	人数	1035	463	572
	平均年齢	45.4歳	48.0歳	45.1歳
	標準偏差	14.1	15.2	13.0
離職期間あり		全体	男性	女性
		人数		
		平均年齢		
離職期間なし	人数	515	203	312
	平均年齢	47.8歳	51.0歳	45.8歳
	標準偏差	13.5	15.1	11.8
離職期間なし		全体	男性	女性
		人数		
		平均年齢		
離職期間なし	人数	520	260	260
	平均年齢	45.0歳	45.6歳	44.4歳
	標準偏差	14.6	14.9	14.3

表 2. 調査対象者の地域別人数・割合

地域	全体		離職期間あり		離職期間なし	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
北海道	42	4.1%	24	4.7%	18	3.5%
東北地方	48	4.6%	28	5.4%	20	3.8%
関東地方	439	42.4%	191	37.1%	248	47.7%
中部地方	156	15.1%	78	15.1%	78	15.0%
近畿地方	192	18.6%	97	18.8%	95	18.3%
中国地方	50	4.8%	31	6.0%	19	3.7%
福岡地方	20	1.9%	12	2.3%	8	1.5%
九州地方	88	8.5%	54	10.5%	34	6.5%

## 2-3. 離職期間経験者の離職期間と離職理由

平均離職期間は1年8ヶ月、標準偏差は3年4ヶ月であった。なお、本稿では離職期間を3ヶ月以上と定義した。理由は失業保険における給付日数90日や自己都合退職における90日の給付制限など、90日という期間が一つの区切りとなっているためである。

離職理由は、「職場環境、仕事内容、労働条件で辞めた」とするものが回答者515名中120名と最も多く、男女別の内訳でも男性は回答者203名中61名と上記の理由が最も多かった。他方、女性は「主として結婚・妊娠・育児を理由に辞めた」が回答者312名中114名と最も多かった。男性は仕事要因を理由に離職するものが、女性は家庭要因を理由に離職するものが多いことがわかる。

## 2-4. 質問紙の構成

### (1) 評定方法

質問紙の評定方法は「1. まったく当てはまらない」、「2. あまり当てはまらない」、「3. どちらでもない」、「4. やや当てはまる」、「5. よく当てはまる」の5件法で行った。質問紙の内容は以下のとおりである。

### (2) サードプレイス志向

サードプレイス志向は、個人で居心地良くすごす場としてのマイプレイス型と地域活性やキャリア形成といった明確な目的をもち人々が交流する目的交流型と社交そのものを目的とし人々が交流する社交的交流型に着目し、Oldenburg(1989)、小林・山田(2013,2014)、片岡・石山(2017b)の先行研究に基づき探索的に質問項目を作成した。加えて、居場所の有無と生活の質、地域への意識を明らかにするために開発された川村・谷口(2013)の「まちなかの居場所感尺度」を参考にした。

### (3) 地域自己効力感

本稿では、地域での活動から生じる個人の自信を「地域自己効力感」とする。上述のとおり自己効力感には課題や場面に特異的に影響を及ぼすものと一般化した日常場面に影響するもの2つの水準がある(Bandura, 1977; 坂野, 1986)ことから「地域自己効力感(課題特異的)」と「地域自己効力感(一般性)」に分け設定した。

地域における課題特異的自己効力感は羽田野(2007)、矢口(2004)、引地・青木・大淵(2009)、片岡・石山(2017a)に基づき、それらを積極的に実行することができる、知っているということを自信とみなし質問項目を作成した。地域自己効力感(一般性)は坂野(1986)の一般性セルフエフィカシー尺度を地域向けに援用し質問項目を作成した。

## (4) 地域コミットメント

地域コミットメントは、Allen & Meyer(1990)の組織コミットメントの3次元モデルを援用し、情緒的、理性的、道徳的という3つの観点から地域への愛着形成を多角的に分析できる柴田・板倉・関・真鍋(2005)の地域コミットメントに基づき設定した。

## 3. 結果

### 3-1. 因子分析の結果

尺度を構成するために、3つの項目群ごとに因子分析(主因子法・Promax回転)を実施した。

#### (1) サードプレイス志向に関する因子分析結果

ここでは、仮説1の分析結果を示す。サードプレイス志向に関し想定した21項目について、天井効果とフロア効果がないことを確認し、主因子法、Promax回転により因子分析を行った。固有値の変化(10.59, 2.27, 0.80, 0.72)と解釈可能性の観点から2因子解が妥当であると判断した。そこで再度2因子を仮定して主因子法、Promax回転により因子分析を行った。累積寄与率は57.38%であった。サードプレイス志向の因子分析結果を表3に示す。

第1因子は「同じ目的をもったメンバーと活動できる」など14項目で構成され、サードプレイスでの交流に関する内容が示されたことから「交流型サードプレイス志向」と名付けた。第2因子は7項目で構成され、「一人で物思いにふけることができる場所である」などサードプレイスでの一人での過ごし方に関する内容が示されたことから「マイプレイス型サードプレイス志向」と名付けた。

各因子を構成する項目の得点平均を算出し尺度得点とし、信頼性係数( $\alpha$ 係数)を算出したところ、「交流型サードプレイス志向」は.94、「マイプレイス型サードプレイス志向」は.91であったことから、十分な内的一貫性が示された。よって仮説1「サードプレイス志向は目的交流型、社交的交流型、マイプレイス型に分かれる」は一部支持された。

#### (2) 地域自己効力感に関する因子分析結果

次に仮説2の分析結果を示す。地域自己効力感(課題特異的)に関し想定した27項目について天井効果とフロア効果がないことを確認し主因子法、Promax回転により因子分析を行った。固有値の変化(16.41, 1.36, 0.79, 0.73)と解釈可能性の観点から2因子解が妥当であると判断した。そこで再度2因子を仮定して主因子法、Promax回転により因子分析を行った。十分な因子負荷量を示さなかった項目は分析から除外した結果、最終的に21項目で2因子が構成された。累積寄与率は67.32%であった。地域自己効力感(課題特異的)の因子分析結果を表4に示す。

第1因子は12項目で構成され、「地域の活動を今後のキ

キャリアと関連づけて考えることができる」など地域におけるキャリア開発や学習への自信に関する内容が示されたことから、「地域学習自己効力感」と名付けた。第2因子は9項目で構成され、「地域のひとと自然な会話ができる」など地域における交流への自信に関する内容が示されたことから「地域交流自己効力感」と名付けた。

各因子を構成する項目の得点平均を算出し尺度得点とし、信頼性係数( $\alpha$ 係数)を算出したところ、「地域学習自己効力感」は.96、「地域交流自己効力感」は.93であったことから、十分な内的一貫性が示された。よって仮説2「地域自己効力感(課題特異的)は地域学習と地域交流に分かれる」は支持された。

表3. サードプレイス志向の因子分析結果  
(Promax 回転後の因子パターン)

交流型サードプレイス志向( $n=94$ )		1	2
同じ目的をもったメンバーと活動できる場所である	.91	.16	
趣味の活動とおし、メンバーと交流できる場所である	.85	.10	
スポーツやレクリエーション活動とおし、メンバーと交流できる場所である	.84	.14	
知識やスキルを習得することができ、メンバーと交流できる場所である	.79	.02	
新しい発見、出会いがある場所である	.77	.00	
一人じゃないと感じる事ができる場所である	.75	.00	
誰かひととくつろいで話せる場所である	.72	.08	
自分のことをあたかも受け入れてくれる人がいる場所である	.71	.12	
新しいことを学べる場所である	.69	.05	
自分に役割があると感ずる場所である	.67	.04	
自分の能力を発揮できる場所である	.65	.18	
何でもかんでも話しかける場所である	.64	.19	
カフェや居酒屋などの他の客や従業員と交流できる場所である	.56	.19	
なにかがある場所である	.55	.32	
マイブレイク型サードプレイス志向( $n=93$ )		1	2
一人で物思いにふけることができる場所である	-.10	.89	
一人で静かに勉強できる場所である	-.07	.87	
一人でくつろげる場所である	-.02	.86	
一人でいても全く寂しくない場所である	-.02	.79	
一人で自分の考えや行動を振り返ることができる場所である	.14	.89	
理想もたてられる場所である	.12	.80	
一人で仕事や勉強することができる場所である	.12	.81	

表4. 地域自己効力感(課題特異的)に関する  
因子分析結果(Promax 回転後の因子パターン)

地域学習自己効力感( $n=90$ )		1	2
キャリア開発のために積極的に地域活動(NPO・ボランティア・自治会活動など)に参加している	.90	.18	
興味がある地域活動(NPO・ボランティア・自治会活動など)に必要知識や技能を身につけて知っている	.82	.10	
興味がある地域活動(NPO・ボランティア・自治会活動など)の始め方を知っている	.80	.09	
地域の活動やボランティアと関連づけて考えることができる	.76	.14	
興味がある地域活動(NPO・ボランティア・自治会活動など)に必要な知識や技能について調べることができる	.71	.14	
地域に目標として定めることができる	.66	.18	
興味がある地域活動(NPO・ボランティア・自治会活動など)の始め方を調べることができる	.67	.14	
地域のカルチャーセンターや大学の公開講座に参加できる	.67	.19	
地域で学習する機会があれば積極的に参加する	.61	.23	
地域活動(NPO・ボランティア・自治会活動など)に参加できる	.50	.32	
他人事や近所の人に相談することができる	.54	.27	
地域交流自己効力感( $n=90$ )		1	2
地域のひとと自然な会話ができる	-.10	.89	
地域のひとと楽しく交流できる	-.06	.88	
地域のひとで子育てすることに不安はない	-.10	.74	
地域のイベント(お祭りや祭典など)に参加できる	.14	.71	
地域のひとと情報交換できる	.14	.80	
知り合いを導くことができる	.12	.80	
地域の自治会・連合会の選挙活動に参加できる	.22	.80	
無理で勧誘してくれる人がいる	.30	.82	

次に、地域自己効力感(一般性)に関し想定した16項目について、天井効果とフロア効果がないことを確認し、主因子法、Promax 回転により因子分析を行った。固有値の変化(4.85,3.14,0.95,0.86)と解釈可能性の観点から2因子解が妥当であると判断した。そこで再度2因子を仮定して主因子法、Promax 回転により因子分析を行った。累積寄与率は42.83%であった。

第1因子は8項目で構成され、「どんなことでも積極的にこなすほうである」や「地域に貢献できる力があると

思う」など地域における積極性や能力への自信に関する内容が示されたことから「行動積極性と能力自信」と名付けた。第2因子は8項目で構成され、「地域での小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである」や「地域でうまくいかないのではないかと不安になることが多い」など地域における失敗や不安に関する内容が示されたことから「失敗に対する不安」と名付けた。

各因子を構成する項目の得点平均を算出し尺度得点とし、信頼性係数( $\alpha$ 係数)を算出したところ、「行動積極性と能力自信」は.84、「失敗に対する不安」は.81であったことから、十分な内的一貫性が示された。

### (3) 地域コミットメントに関する因子分析結果

地域コミットメントに関し想定した15項目について、天井効果とフロア効果がないことを確認し、主因子法、Promax 回転により因子分析を行った。固有値の変化は(8.12,1.10,0.76,0.62)と解釈可能性の観点から2因子解が妥当であると判断した。そこで再度2因子を仮定して主因子法、Promax 回転により因子分析を行った。累積寄与率は55.67%であった。

第1因子は8項目で構成され「今、この地域を去るとしたら、罪悪感を感じるだろう」や「現在の地域で仕事を続ける義務がある」など地域で仕事を行うことの必要性や地域への義務感の項目が含まれていることから、「地域への規範的関与」と名付けた。先行研究では道徳的な観点に注目していたが、道徳的な側面だけではなく規範的な要素の比重が大きいと判断した。第2因子は、7項目で構成され

「私は地域に愛着を持っている」や「私は地域の一員であると感じる」など先行研究と同様に地域への情緒的な愛着が示されたことから「地域への情緒的関与」と名付けた。先行研究では、愛着、理性、道徳という3点の側面に注目していたが本稿では情緒と規範の2点となった。

各因子を構成する項目の得点平均を算出し尺度得点とし、信頼性係数( $\alpha$ 係数)を算出したところ、「地域への規範的関与」は.90、「地域への情緒的関与」は.90であったことから、十分な内的一貫性が示された。

### (4) サードプレイス志向、地域自己効力感、 地域コミットメントの変数間の関係

全回答者1035名のデータの特徴を確認するため、各変数間の平均値、標準偏差、信頼性係数、相関関係について、項目平均値を尺度得点として算出した。サードプレイス志向、地域自己効力感、地域コミットメントの変数間の関係を表5に示す。5件法による回答の平均値はすべてが3未満であり、信頼性係数は.81から.96と十分な内的一貫性が示された。相関関係はすべての各変数間に有意な正の相関が認められた。

**表 5. サードプレイス志向、地域自己効力感、地域コミットメントの変数間の関係**

変数	N	平均	SD	1	2	3	4	5	6	7	8
1 交流型サードプレイス志向	1035	2.90	.80	1.00							
2 マイプレイス型サードプレイス志向	1035	2.82	.84	.81	1.00						
3 地域学習自己効力感	1035	2.40	.83	.55	.40**	1.00					
4 地域交流自己効力感	1035	2.72	.83	.53	.47**	.29**	1.00				
5 失敗に対する不安	1035	2.04	.68	.15	.16**	.25**	.21**	1.00			
6 行動積極性と能力自信	1035	2.64	.71	.84	.44**	.32**	.33**	.70**	1.00		
7 地域への規範的関与	1035	2.43	.77	.59	.34**	.23**	.59**	.50**	.20**	1.00	
8 地域への情緒的関与	1035	2.74	.82	.52	.36**	.22**	.54**	.59**	.20**	.52**	1.00

### 3-2. 地域コミットメントに関する階層的重回帰分析

地域コミットメントには、性別、年齢といった人口統計学的変数が影響すると考えられる。そこで分析モデルのとおり、サードプレイス志向は地域自己効力感が媒介し地域コミットメントに影響を与えることを想定したうえで、人口統計学的変数の影響を検証することとした。

具体的には、人口統計学的変数とサードプレイス志向、さらに人口統計学的変数とサードプレイス志向及び地域自己効力感といった要素ごとの状況を検証するため、Step1 から Step3 に分け全回答者 1035 名のデータに基づき階層的重回帰分析を行った。なお、本稿では人口統計学的変数を統制変数とした。分析結果を表 6 に示す。

Step1 は統制変数として性別ダミー(男性=1、女性=0)、年齢、大都市(東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、大阪府、京都府、兵庫県)ダミー(大都市=1、大都市以外=0)、離職期間ダミー(期間有り=1、無し=0)を投入し、Step2 はサードプレイス志向の下位尺度である「交流型サードプレイス志向」、「マイプレイス型サードプレイス志向」を投入し、Step3 は地域自己効力感(課題特異的)の下位尺度である「地域学習自己効力感」、「地域交流自己効力感」、地域自己効力感(一般性)の下位尺度である「失敗に対する不安」、「行動積極性と能力自信」を投入した。

分析の結果、地域コミットメントの下位尺度である「地域への規範的関与」では、Step1 は「男性」、「高年齢」、「大都市以外」、「離職期間無し」が有意な正の影響を示し、Step2 は「男性」、「大都市以外」、「離職期間無し」、「交流型サードプレイス志向」、「マイプレイス型サードプレイス志向」が有意な正の影響を示し、Step3 はサードプレイス志向の影響はなくなり、「男性」、「大都市以外」、「離職期間無し」、「地域学習自己効力感」、「失敗に対する不安」、「行動積極性と能力自信」が有意な正の影響を示した。

次に、地域コミットメントの下位尺度である「地域への情緒的関与」では、Step1 は「高年齢」、「大都市以外」、「離職期間無し」が有意な正の影響を示し、Step2 は「男性」、「高年齢」、「離職期間無し」、「交流型サードプレイス志向」が有意な正の影響を示し、Step3 は統制変数とサードプレイス志向の影響はなくなり、「地域交流自己効力感」、「失敗に対する不安」、「行動積極性と能力自信」が

有意な正の影響を示した。加えて Step1 から Step2、Step2 から Step3 への決定係数の変化量が、2 つの従属変数においてすべて有意であった。なお、VIF は 10 を超えると多重共線性が生じているとされるが(小塩, 2015)、本稿では最大 3.82 であったことから問題が無いと判断した。

**表 6. 地域コミットメントに関する階層的重回帰分析**

説明変数	地域への規範的関与				地域への情緒的関与			
	Step1	Step2	Step3	Step4	Step1	Step2	Step3	Step4
性別	.08**	.08**	.07*	.05	.06**	.06**	.06**	.03
年齢	.04*	.03	-.02	.02***	.12***	.12***	.12***	.07
大都市	-.03**	-.03**	-.05*	-.07*	-.04*	-.04*	-.04*	-.02
離職期間の有無	-.13***	-.13***	-.03***	-.04***	-.03***	-.03***	-.03***	-.02
サードプレイス志向								
交流型サードプレイス志向		.27***	.02	.25***		.06		-.02
マイプレイス型サードプレイス志向		.13**	.02	.12**		.04		.03
地域学習自己効力感			.42***				.37***	
地域交流自己効力感			.36***				.29***	
失敗に対する不安			.14***				.20***	
行動積極性と能力自信			.16***				.22***	
R <sup>2</sup>	.02***	.13***	.42***	.43***	.02***	.12***	.42***	.43***
ΔR <sup>2</sup>		.11***	.29***	.01***		.10***	.28***	.01***

### 3-3. 離職期間の有無による t 検定の結果

上述の階層的重回帰分析の結果から、離職期間の有無によって地域コミットメントへの影響に違いがあることがわかった。そこで離職期間を経験している者と経験していない者でサードプレイス志向、地域自己効力感、地域コミットメントに違いがあるのかを検証するため、離職期間の有無による t 検定を行った。分析結果を表 7 に示す。

t 検定の結果、地域自己効力感(一般性)の下位尺度である「行動積極性と能力自信」、地域コミットメントの下位尺度である「地域への規範的関与」、「地域への情緒的関与」において、離職期間有りが有意に低い得点を示した。つまり、離職期間を経験している者は離職期間を経験していない者に比べ、地域自己効力感、地域コミットメントが統計的にも有意に低いことが明らかになった。

**表 7. 離職期間の有無による t 検定の結果**

変数	離職期間有り				離職期間無し			
	N	平均	SD	t	N	平均	SD	t
サードプレイス志向								
交流型サードプレイス志向	510	2.81	.77	0.78	525	2.98	.79	.88
マイプレイス型サードプレイス志向	510	2.80	.82	0.78	525	2.84	.86	.42
地域学習自己効力感								
(課題特異的)	510	2.40	.84	0.78	525	2.57	.83	1.81
地域交流自己効力感	510	2.74	.81	0.77	525	2.69	.85	.62
失敗に対する不安	510	2.07	.65	0.78	525	2.00	.70	-1.54
行動積極性と能力自信	510	2.70	.69	0.78	525	2.87	.72	-2.88**
地域への規範的関与	510	2.31	.74	0.78	525	2.34	.78	-0.38
地域への情緒的関与	510	2.67	.78	0.78	525	2.87	.85	-2.78**

### 3-4. サードプレイス志向、地域自己効力感、地域コミットメントの因果モデルの検討

ここでは、仮説 3、仮説 4 の分析結果を示す。上述の階層的重回帰分析の結果から、地域コミットメントに与える影響において、統制変数の影響を見た上で、STEP3 ではサードプレイス志向の影響が消え、地域自己効力感の影響が確認され、かつ決定係数の変化量が統計的にも有意であったことから地域自己効力感が媒介していることがわかった。そこで媒介の経路を詳細に確認するため、分析モデルにしたがいサードプレイス志向と地域自己効力感が地域コミットメントに与える影響を離職期間の有無による多母集団同時分析により分析することとした。

まず、仮説 3 の分析結果を示す。離職期間の有無にかかわらずサードプレイス志向が地域自己効力感を媒介とし、

地域コミットメントに影響を及ぼすのかを検討する。

離職期間無しと回答した 520 名のデータを基に分析した因果モデルの結果を図 2 に、離職期間有りと回答した 515 名のデータを基に分析した因果モデルの結果を図 3 に示す。

サードプレイス志向の下位尺度である「交流型サードプレイス志向」、「マイプレイス型サードプレイス志向」を第 1 段階、地域自己効力感(課題特異的)の下位尺度である「地域学習自己効力感」、「地域交流自己効力感」と地域自己効力感(一般性)の下位尺度である「失敗に対する不安」、「行動積極性と能力自信」を第 2 段階、地域コミットメントの下位尺度である「地域への規範的関与」、「地域へ情緒的関与」を第 3 段階と想定した。分析は Amos24.0 で行った。適合度指標は GFI=.994、AGFI=.970、RMSEA=.025 であり、十分な適合と考えられる。

離職期間の有無にかかわらず、サードプレイス志向から地域自己効力感を媒介とし、地域コミットメントへ有意な正のパスが見出された。

さらに、地域自己効力感から地域コミットメントへの媒介を検証するため、ブートストラップ法に基づき直接的に検証した。ブートストラップ法は、Preacher & Hayes(2004, 2008) が、Baron & Kenny(1986) の回帰分析による媒介効果の分析方法に対して、間接効果の推定値の標本の 95%信頼区間を用いて検定する方法を示した。Amos24.0 によるブートストラップ法(5000 ブートストラップ)を用いてバイアス修正済みの信頼区間推定により間接効果と総合効果の有意水準を検討した。

その結果、離職期間無しでは交流型サードプレイス志向は地域自己効力感を媒介とし地域への規範的関与に有意な正の間接効果(.25,  $p < 0.001$ )と総合効果(.25,  $p < 0.001$ )を示し、地域への情緒的関与にも有意な正の間接効果(.27,  $p < 0.001$ )と総合効果(.36,  $p < 0.001$ )を示した。マイプレイス型サードプレイス志向は地域自己効力感を媒介とし地域への規範的関与に有意な正の間接効果(.08,  $p < 0.01$ )と総合効果(.08,  $p < 0.01$ )を示した。

他方、離職期間有りでは交流型サードプレイス志向は地域自己効力感を媒介とし地域への規範的関与に有意な正の間接効果(.26,  $p < 0.001$ )と総合効果(.26,  $p < 0.001$ )を示し、地域への情緒的関与にも有意な正の間接効果(.29,  $p < 0.001$ )と総合効果(.28,  $p < 0.001$ )を示した。マイプレイス型サードプレイス志向は地域自己効力感を媒介とし地域への規範的関与に有意な正の間接効果(.06,  $p < 0.01$ )と総合効果(.06,  $p < 0.01$ )を示し、地域への情緒的関与にも有意な正の間接効果(.04,  $p < 0.05$ )と総合

効果(.04,  $p < 0.05$ )を示した。この結果、地域自己効力感が統計的にも有意に媒介となっていることが明らかになった。よって仮説 3「サードプレイス志向は地域自己効力感を介し地域コミットメントに正の影響を及ぼす」は支持された。



図 2. <離職期間無し>サードプレイス志向、地域自己効力感、地域コミットメントに関するモデル

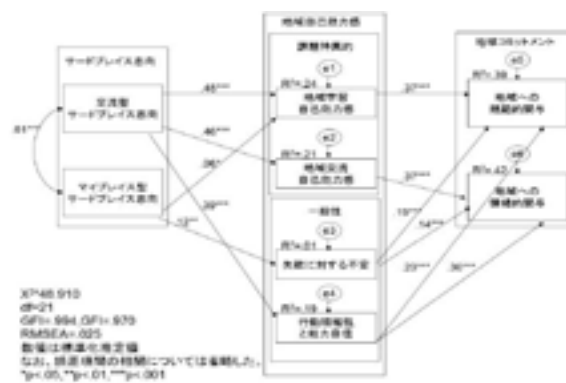


図 3. <離職期間有り>サードプレイス志向、地域自己効力感、地域コミットメントに関するモデル

次に、仮説 4 の分析結果を示す。t 検定の結果において、サードプレイス志向が離職期間の有無別による差がないにもかかわらず、地域自己効力感(一般性)と地域コミットメントには差があることが明らかになった。この結果から、離職期間有無の違いにより、サードプレイス志向から地域自己効力感、地域コミットメントへの影響の流れが異なることが考えられる。そこで多母集団同時分析の結果を詳細に確認することとした。

離職期間が無い場合は、「マイプレイス型サードプレイス志向」から「行動積極性と能力自信」に有意な正のパスが見出され、「交流型サードプレイス志向」から直接「地域への情緒的関与」に有意な正のパスが見出されたが、離職期間がある場合ではこの影響は見られなかった。

他方、離職期間がある場合は「マイプレイス型サードプレイス志向」から「失敗に対する不安」を媒介とし「地域への情緒的関与」に有意な正のパスが見出されたが、離職期間が無い場合はこの影響は見られなかった。

離職期間有無の違いによるパラメータ間の差の検定を行ったところ、「行動積極性と能力自信」を介した「地域への



情緒的関与」へのパスと、「失敗に対する不安」を介した「地域への情緒的関与」へのパスについて離職期間の有無のパス係数が有意に異なり( $p<0.001$ )、「交流型サードプレイス志向」から「地域への情緒的関与」へのパスについて離職期間の有無によってパス係数が有意に異なっていた( $p<0.01$ )。よって仮説4「離職期間有無の違いによって、地域コミットメントへの影響の過程に差がある」は支持された。

## 4. 考察

### 4-1. 理論的意義

#### (1) 交流型とマイプレイス型のサードプレイスの特性

本稿では、サードプレイス志向は目的交流型、社交的交流型、マイプレイス型の3つに分かれると仮説を立てたが、分析の結果、交流型とマイプレイス型の2つに分かれた。交流型が分割されなかった理由であるが、人々の交流そのものの共通性が強く影響していることが考えられる。従来の先行研究(小林・山田,2013,2014)の結果と一致しており、地域への愛着形成には地域での交流が重要であることが、あらためて示唆された。

また人々が交流する交流型サードプレイス志向と個人が居心地よく過ごすマイプレイス型サードプレイス志向では、サードプレイスでの過ごし方において対照的な側面が感じられるが、片方が地域コミットメントに正の影響を及ぼした際、片方が負の影響を及ぼすという逆の性質を持つものではなく、それぞれが地域コミットメントに正の影響を及ぼしていた。これらの結果から、交流型とマイプレイス型が共に地域への愛着や規範の高まりに寄与していたことが明らかになった。

#### (2) 交流型サードプレイス志向から地域コミットメントへの影響における2つの経路

本稿の調査により、地域コミットメントへの影響には2つの経路があることが明らかになった。

1つ目は交流型サードプレイス志向から地域自己効力感(課題特異的)の下位尺度である「地域学習自己効力感」を介し地域への規範的関与へ影響する経路である。地域学習自己効力感とは積極的に地域活動ができるという自信や地域で学ぶことができるという自信であり、地域への規範的関与は地域への義務感や責任感をあらわしている。地域活動への積極的なかわりや地域に関する知識を得ることで自信が高まり、義務感や責任感が生じ地域への規範が高まったと考えられる。

2つ目は交流型サードプレイス志向から地域自己効力感(課題特異的)の下位尺度である「地域交流自己効力感」を介し、地域への情緒的関与へ影響する経路である。地

域交流自己効力感とは、地域の人々と交流できる、人間関係を構築できるという自信であり、地域への情緒的関与は地域への愛着や所属感をあらわしている。地域の人々とのふれあい、つながりを作ることで愛着や所属感が生じ、地域への情緒的関与が高まったと考えられる。

従来の先行研究では、地域での交流が地域コミットメントを高めていることを示していた(引地・青木・大淵,2009)が、本稿において交流から生じる地域の愛着形成には、2つの経路があることを明らかにすることができた。

#### (3) 交流型サードプレイス志向の影響

離職期間の有無にかかわらず、交流型サードプレイス志向は地域自己効力感(一般性)の下位尺度である「行動積極性と能力自信」に正の影響を及ぼし、さらに行動積極性と能力自信を介し地域への規範的関与と情緒的関与に正の影響を及ぼしていることがわかった。

自己効力感には代理体験や言語的説得といった要素があり(Bandura, 1977)、周囲の人間の頑張りや励ましによって自信を高めていくことがわかっている。実際に離職期間を経験した者が地域での交流により自信を高めた事例(片岡・石山 2016)もあり、行動への積極性や能力に対する自信を高めるには人々との交流が重要であることが考えられる。様々な人と交流することで自信を得て、積極的に地域にかかわることで地域への愛着や規範を高めることができるのであろう。本稿では、地域自己効力感に関し課題特異的と一般性に分け分析したが、この2つの媒介をそれぞれ分析することで、交流型サードプレイス志向から地域コミットメントへの影響をより緻密に明らかにすることができた。

#### (4) マイプレイス型サードプレイス志向の影響

離職期間がある場合は、マイプレイス型サードプレイス志向が地域自己効力感(一般性)の下位尺度である「行動積極性と能力自信」を高めていなかった。従来の先行研究(Eden & Aviram, 1993 他)では離職期間を経験したことによる自信の低下を指摘しているが、上述のように行動への積極性や能力に対する自信を高めるには、人々との交流が重要であると考えられる。つまり一人で過ごすマイプレイス型では、離職期間を経験し自信が低下している者の積極性や能力への自信を高めることはできなかったのであろう。

他方、離職期間が無い場合はマイプレイス型サードプレイス志向が地域自己効力感(一般性)の下位尺度である「行動積極性と能力自信」から地域コミットメントに正の影響を及ぼしていた。離職期間を経験していないものは就職後、常に人々と接していると推測され一人の時間がリフレッシュになり行動への積極性や能力に対する自信を得ることで、地域への愛着や規範を高めていたのだらう。

## 4-2. 実践的意義

### (1) サードプレイスを利用する個人に対して

離職期間が無い場合は、マイプレイス型、交流型にかかわらずサードプレイス志向から地域自己効力感を媒介とし、地域コミットメントに正の影響を及ぼしていた。離職期間を経験していない者が地域への愛着や規範を高めるには、マイプレイス型サードプレイス、交流型サードプレイスを意図的にバランス良く利用することが効果的であるだろう。他方、離職期間がある場合も、マイプレイス型、交流型ともにサードプレイス志向から地域自己効力感を媒介とし、地域コミットメントに正の影響を及ぼしていたが、離職期間が無い場合に比べ地域自己効力感と地域コミットメントが統計的にも有意に低いことから、地域への積極的なかわりや地域の知識が少ないことが伺える。特にマイプレイス型サードプレイス志向では、行動の積極性や能力に対する自信を高めていなかったことから、離職期間を経験している者が地域への愛着や規範を高めるには、地域のサードプレイスにおいて様々な人々と交流し自信を得ていくことが必要であろう。

### (2) サードプレイスを提供する側

#### (行政、民間等サービス 事業者)に対して

サードプレイス志向は地域自己効力感を媒介とし、地域コミットメントを高めていた。加えて、実践的意義(1)で述べたように離職期間有無の差異で地域のサードプレイスの有用性に違いがみられた。今後ますます生き方や働き方が多様化し、様々な理由で離職期間を経験する者が増えていくことが予想される。一人でくつろぐ場を確保しつつも交流が促される地域のサードプレイスを増やしていくことが多様な人々の地域にかかわるきっかけを作り、地域の担い手を増やしていく方策になるであろう。

## 4-3. 今後の課題

本稿では、サードプレイス志向から地域自己効力感を媒介とする地域コミットメントへの影響について、離職期間有無の差異を含め検討した。しかしサードプレイスの具体的な事例やサードプレイス志向から地域コミットメントへの影響における詳細なメカニズムを知るためには、年代別、地域別、離職期間別など様々な層に分けさらに分析する必要があると考える。今後も継続的なインタビュー調査やアンケート調査を実施していく。

## 謝辞

本研究は、地域活性学会第9回研究大会での発表を加筆・修正したものです。参加者の方々より貴重なアドバイスをいただきました。また匿名の査読者の方からの貴重なご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

註 1) GSES 一般性セルフ・エフィカシー尺度 ころねと株式会社 坂野雄二・東條光彦・福井至・小松智賀

## 引用・参考文献

- [1] Allen, N.J. & Meyer, J.P. (1990) The measurement and antecedents of affective, continuance and normative commitment to the organization, *Journal of Occupational Psychology*, 63, pp.1-18.
- [2] Bandura, A.(1977) *Social learning theory*. Upper Saddle River: Prentice-Hall, Inc(原野広太郎監訳(1979)『社会的学習理論：人間理解と教育の基礎』金子書房).
- [3] Baron, R.M. & Kenny, D.A. (1986) The moderator-mediator variable distinction in social psychological research: Conceptual, strategic, and statistical considerations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 1173-1182.
- [4] Eden, D. & A. Aviram. (1993). Self-Efficacy Training to speed Reemployment: Helping People to Help Themselves. *Journal of Applied Psychology*, 78(3), pp.1-36.
- [5] 江藤道子・鈴木毅・松原茂樹・奥俊信(2011)「主婦にとってのカフェの場所性に関する研究」『2011 年日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)』pp.833-834.
- [6] 畠山雄豪・丹羽由佳理・佐野友紀・菊池雄介・佐藤泰(2015)「立地環境および利用者傾向が行動分布に与える影響：行動観察調査からみたカフェのサードプレイス利用分析 ―その1―」『日本建築学会計画系論文集』Vol.80, No.711, pp.1067-1073.
- [7] 羽田野慶子(2007)「女性のキャリア形成に関する調査研究」『国立女性教育会館研究ジャーナル 11』pp.103-112.
- [8] 引地博之・青木俊明(2005)「地域に対する愛着形成の心理過程の検討」『景観・デザイン研究講演集』No1, pp.232-235.
- [9] 引地博之・青木俊明・大淵憲一(2009)「地域に対する愛着の形成機構-物理的環境と社会的環境の影響-」『土木学会論文集D』Vol65 第2号, pp.101-110.
- [10] 廣川進(2006)『失業のキャリアカウンセリング 再就職支援の現場から』金剛出版.
- [11] 井川勇・高田光雄・三浦研(2005)「サードプレイスの概念からみたカフェ空間に関する考察-京都市都心部におけるカフェ空間の実態調査を通して-」『2005 年日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)』pp.515-516.
- [12] 石山恒貴(2015)『パラレルキャリアを始めよう!』ダイヤモンド社.
- [13] 片岡亜紀子・石山恒貴(2016)「キャリアブレイクを経験した女性の変容-パソコンインストラクターを対象

- とした実証研究-』『産業カウンセリング研究』第 18 巻 第 1 号, pp.9-24.
- [14] 片岡亜紀子・石山恒貴(2017a)「離職者の意識と行動が地域コミットメントに与える影響」『地域活性研究』Vol.8, pp.1-10.
- [15] 片岡亜紀子・石山恒貴(2017b)「地域コミュニティにおけるサードプレイスの役割と効果」『地域イノベーション第9号』pp.73-86.
- [16] Kataoka, A. (2017) The Design and Effect of Purposeful Interaction-oriented Third Places in Local Communities. Proceedings of 2017 International Conference of Asian-Pacific Planning Societies, pp.226-229.
- [17] 川村竜之介・谷口綾子(2013)「まちなかの居場所が生活の質・地域への意識に与える影響に関する研究」『土木計画学研究』Vol.69, No.5, pp.1-335-344.
- [18] 小林重人・山田広明(2013)「地域のサードプレイスとしてのカフェ創出に関する研究—ソーシャル・キャピタルからの新たなサードプレイス像の検討—」『知識共創』No.3, pp. IV1-10.
- [19] 小林重人・山田広明(2014)「マイプレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究：石川県能美市の非常設型「ひよっこりカフェ」を事例として」『地域活性研究』Vol.5, pp.3-12.
- [20] 本柳亨(2015)「ファストフード店の利用者に関する考察：サードプレイスを目的とした利用者の分析を中心に」『学習院女子大学紀要』No. 17, pp. 163-176.
- [21] 中塚雅也(2008)「属性と経験による地域コミットメントの相違に関する実証分析：篠山市K地区を事例として」『農林業問題研究』44(1), pp. 135-139.
- [22] 丹羽由佳理・佐野友紀(2011)「勉強や仕事を目的としたサードプレイスとしてのカフェ利用に関する実態調査」『2011 年日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)』pp.831-832.
- [23] Oldenburg, R. (1989) The great good place, New York: Marlowe & Company( 忠平美幸訳 [2013]『サードプレイス』みすず書房).
- [24] 大橋寿美子・加藤仁美(2015)「郊外戸建住宅地における地域住民と大学生による高齢者の居場所の形成 その2—伊勢原市愛甲原住宅での壁面アート制作を通じて—」『湘北紀要』No.36, pp.1-11.
- [25] 小塩真司(2015)『研究をブラッシュアップする SPSS と Amos による心理・調査データ解析』東京図書株式会社.
- [26] Preacher, K. J. & Hayes, A.F. (2004) SPSS and SAS procedures for estimating indirect effects in simple mediation models. Behavior Research Methods, Instruments, and Computers, 36(4), pp.717-731.
- [27] Preacher, K. J. & Hayes, A.F. (2008) Asymptotic and resampling strategies for assessing and comparing indirect effects in multiple mediator models. Behavior Research Methods, 43(3), pp.879-891.
- [28] 坂野雄二(1986)「一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み」『行動療法研究』12(1), pp.73-82.
- [29] Sherer, Maddux, Mercandante, Prentice-dunn, Jacobs & Rogers, R.W. (1982). The self-efficacy scale: Construction and validation. Psychological Reports, 51, pp.663-671.
- [30] 柴田友厚・板倉宏昭・関義雄・真鍋美保子(2005)「地域イノベーションと地域コミットメント」『第20回年次学術大会講演要旨集Ⅰ』pp.92-95.
- [31] 高橋弘司(1997)「組織コミットメント尺度の項目特性とその応用可能性—3次元組織コミットメント尺度を用いて—」『経営行動科学』11(2), pp.123-136.
- [32] 高橋弘司・渡辺直登・野口裕之・Meyer, J.P. (1998)「3次元組織コミットメント尺度日本語版の翻訳等価性の検討：日本—カナダ比較」『経営行動科学学会年次大会発表論文集』(1), pp. 159-169.
- [33] 矢口悦子(2004)「生涯学習体験と女性のキャリア形成」『生涯学習の活用と女性のキャリア形成支援に関する調査研究』pp.9-16.

# Abstract

The objective of this paper was to examine whether third-place orientation and confidence related to community activities (sense of community self-efficacy) have an impact on community commitment, by noting the difference between the existence and lack of a period between jobs in light of changes in people's lives and work in recent years. A survey conducted among 1,035 respondents (515 with a period between jobs and 520 without) revealed that third-place orientation had a positive impact on community commitment via a sense of community self-efficacy, regardless of the existence of a period between jobs. It was also found that impact due to exchange-type third-place orientation on community commitment could occur in two ways: through community exchange and through community learning. In terms of measures for increasing the number of community leaders, an exchange-type measure was found to be effective for those who had a period between jobs, while an exchange-type and my-place-type measures in a balanced manner were found to be effective for those without a period between jobs.